

馬渡の眼 8

「あたりまえ」

馬渡 徳子

父の七回忌法要の折、父の療養中、その病気の特性から、さまざまな事件を起こすことを、逆に面白がって、最期まで支えて下さった幼馴染のご住職が引退をされておられたことを知ることとなる。

そのバトンを受け継がれたご住職より、オペラ歌手のような声にて、昨今の世相を反映した以下のお話を拝聴した。

「あたりまえ」の対義語は、何か？

私たちは、誰も応えられなかった。

「ありがたい」とのこと。

私たちは、皆、黙って頷いた。そうだな。「今こうしてあること、そのことに、改めて眼を向けてみると、沢山のことに感謝の気持ちを素直にもてるんだな」ということを、日々忘れがちだなと気付いた。

父を看取った後の石川県でのワークショップで、団さんよりマガジンへ

の投稿を勧めて頂き、丁度一周忌の節目に、父と先代のご住職のエピソードを記載した回がある。

ご住職が 3.11 の東日本大震災の翌日に、お寺の掲示板に書かれた

「生きてるだけでだいたいオッケー by マギー史郎」

との文脈に、翌日から、何故か父が花を添えるようになり、そこが通学路でもあったことから、父にその行為が叶わなくなった時からは、地元の小学生にその行為が引き継がれたこと。父は、障がいのある孫の通学に六年間付き添っており、その行為が、やがて「**通学時の見守り隊**」と発展し、表彰を受け、葬儀の際には、一番正面に飾らせて頂いた。

以下は、葬儀の際の先代ご住職の言葉である。

「一番印象深い光景は、障がいのあるお孫さんに付き添って、毎日通学される姿です。私たちは、障がいのある児童が、特別支援学校ではなく、普通学校に行くんだから、『付き添うのが、あたりまえでしょう』と思ってないでしょうか。とんでもない。お孫さんの卒業式の日、幼馴染の彼に「六年間、本当にお疲れ様でした。」と声をかけますと、「いえいえ、こうして子どもらと話もできるし、ご近所さんやお店の方、おまわりさん、先生方にも毎日ご挨拶ができる。おかげさまで、こうして足を鍛えることもできました。『ありがたい』六年間でした。と応えられました。私は、彼の尊い姿に、合掌し、心を込めて深く頭を垂れました。」というエピソードをご紹介下さったのである。

確か、ご住職は、当時、副住職でいらしたはず。このエピソードを覚えていて下さったのだろうか。と察すると、胸が熱くなった。

先代のご住職、そして天国のお父さん。

二年前から、世界は、コロナウィルスで、「あたりまえ」とか「ふつう」という概念が、随分と揺さぶられてきました。

この時代を生きたことに、深謝して、「耐える」ではなく、「変えて」いく価値を伝えていきたいと思います。